
仮面ライダーディケイドAnother ~世界の救世主~

激突皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー＝ディケイドAnother～世界の救世主～

【Zコード】

Z4644X

【作者名】

激突皇

【あらすじ】

無限に存在するいくつもの世界。そのいくつもの世界に崩壊の危機が訪れる。世界の崩壊を企む巨大な陰謀。それに対抗するため世界はある一人の少年を世界の救世主である「仮面ライダー＝ディケイド」に選んだ。彼は世界の崩壊を阻止するため、別の世界へ旅に出る。果たして、世界の崩壊を企む巨大な陰謀を阻止し、彼らは自分達の未来を守ることはできるのか。「一度決めたことは絶対に貫き通す！それがオレだ！」「全てを紡ぎ、未来へ導け！」

プロローグ　～始まつし救世主の物語～（前書き）

自分の初投稿小説です
暖かい目で見ていてください
では、どうぞ

プロローグ ～始まつし救世主の物語～

「…………」

目の前に見えるのは無限に広がる闇
その中に彼は一人ポツンと立っていた

「なんでオレ、こんなとこにいんだ……？」
わけもわからず混乱する彼に何かが話しかけてきた

…………れし…………ね…………

「だ、だれだ！？」

…………え…………れし…………う…………

「何いってんだ？聞こえねえよー！」

…………選ばれし少年よ…………

「選ばれし少年…………つてオレのことか！？」

その質問に答えるように謎の声は言葉を変えた

…………世界に崩壊の危機が訪れている…………

「世界に崩壊に危機？どうこいつ」とだー？

…………君に救世主に力を与える…………
…………その力で…………
…………せず…………て…………れ…………

「ちよつ、オイーまでよーびついことだ！救世主の力ってなんだよ！？」

謎の声が遠ざかっていくのが判る

「オレの質問に答える！オイ！！」

・・・たの・だぞ・・・大和・・・

その言葉を最後に彼の意識は遠のつていった

ヒュンボルトの日常の崩壊

「・・・と・ん・・・・、せ・じく・ん・・・・」

また声が聞こえる

ではじめの頃は、他の頃と並んで體がなれた世の中へ、なまかする

「やまとくん・・・、大和くん・・・！」

「」の瓶せゐや・・・

「芳野よしの 大和やまとおー！」

「はいいい！」

な、なんだ！？いきなり声が野太くなつたぞ！？

周りの視線がオレに集まる

ええつと、まず状況を整理しよう

ここは教室、今は五時限目の日本史の授業
そして目の前にはご立腹の日本史の教師

「よお芳野、俺の授業はそんなに退屈だったか?」

・・・状況理解、つまりオレは授業中に寝ていたというわけだ

「いやあ、先生の授業がつまらないわけではなくてですね、飯食つた後つて眠くなるじゃないですか・・・それで気がついたら・・・」

「寝てたというわけか・・・」

「はい・・・すいません・・・」

そう言い終えた直後クラスの奴らがドツと笑い出す

「はあ、つたく罰として教科書32ページ読め」

「はい・・・」

ふう、普段ある程度まじめにしていたおかげであんま怒られずにすんだか

・・・にしても、あの夢つていつたいなんだつたんだ・・・?

教科書を読み終えたオレはあの夢について考えていた

「もひ、大和くん授業中に寝ちゃだめでしょ」

授業が終わり次の授業の準備をしていると隣の席から「望月 美咲もちづき みさき」

が話しかけてきた

美咲はオレがやっかいになつている家の孫娘で小さい頃からの付き合いだ

「しゃあねえだろ、気がついたら寝てたんだから。てか起こしてく
れよ気づいてたんなら」

「起こしたよ、でも全然起きないんだもん」

「うつ・・・ま、まあいいじゃねえか、あんま怒られなかつたんだ

し」

「そういう問題じゃないでしょ、もひつ……」

そんなやり取りをしてくると

「あいかわらず仲がよろしいですねお一人さん」

声の方を向くところもつるんでいるダチ一人がやってきた

「そうか? ふつうだる」「うん」

「いやいや、お前らふたりは普通の男女の友達関係とは違つ仲の良

さだよ、うん」

「そりや そりや、家族みたいなもんなんだから」「いやまあ そりやなんだけどよ、なんつーかよ、うーん……」

ダチの一人(男)が考えているともう一人(女)が

「言つなれば長年寄り添つて生きてきた、まさに夫婦のよつたな関係
!..じゃないかな?」「うん」

「ふうええ!..ふふふ夫婦!..?」

その言葉に美咲が顔を真っ赤にして驚く

「おおー! そりやそれそれ、俺が言いたかったのはそりやう」とな
んだよ」

「夫婦つて、お前らなあ……」

「あはは、まあ『冗談はこの辺にして一人とも今日放課後暇?』

「冗談つて……まあとくに用事はないが美咲はどうだ」

「ふ、夫婦……大和くんと夫婦……」

「うつむいてなんかぶつぶつ言つてゐる

「おーい、美咲」

「ふえ！？な、なに！？」

また顔を赤くして驚いた

・・・ちょっとは落ち着け

「だからあ、美咲ちゃんは今日放課後暇かつて」と

「あ、う、うん暇だようん」

「ならで、今日みんなでどつか遊び行かない？」

「ああいいぜ」

「うん、私もいいよ」

「よっしゃ、んじゃ・・・」

するとチャイムが鳴った

「おつと、時間切れか。じゃつまた後でな」

「約束だよー」

一人が名前を席へ戻つて行きオレ達も席についた

「じゃあなー」

「美咲ちゃん、大和くん、また来週〜」

「おう」

「バイバーイ」

放課後四人で遊んだ後、時間も頃合となつたので帰ることにした

「 「・・・・」 」

オレと美咲の間に会話はない

なぜなら家も一緒に、クラスも一緒になれば話すことなんてほとんどない

でもそんなことは昔から同じなので気まずさとかはない
むしろこうやって無言で帰るのはなんとなく落ち着く

たぶん美咲もそうなんだろ？

このときの美咲はなんつーか、自然な笑顔をしているし

そんなこんなで家に到着

『望月写真館』

ここがオレがやっかいになつている家、もとい店である
といつても今は写真館というより喫茶店に近い店になつている

「 「ただいまー」 」

「おお、二人ともおかえり」

カウンターから話しかけてきたのはこの店の主人でありオレ達を育

てくれる
「もがつき 望月

そうたろう 宗太郎」 じいちゃんである

「おかえりー、大和君、美咲ちゃん

「おかえりー」

「」の常連の人達からも挨拶を受け軽く会釈をしてオレ達の口課を行つ

「・・・・・」

オレと美咲はお茶の間にある仏壇に線香を焚き手を合わせている
写真は三つ

一つは優しそうな顔のおばあさん
オレ達のばあちゃんである

ばあちゃんはオレを拾ってくれた人で三年前にこの世を去っている
残りの一一つもばあちゃんに負けないほど優しそうな顔をしている
違いを擧げるとこの二人は二十代後半の若い男女であることだ
この二人は美咲の母親と父親だ

十年ほど前、親子三人で歩いているところにトラックが突っ込み、
二人は美咲をかばつてトラックに轢かれこの世を去った
両親を失った美咲はじいちゃんとばあちゃんが引き取つてオレとい
つしょに育てくれた

そして今はオレ、美咲、じいちゃんの三人でこの家に暮らしている

日課が終わり、自分達の部屋へ向かおつとすると

「あれ？ 美咲、頼んだいたものは？」
「え？・・・あつ！」

そう言われ美咲は何かを思い出したようだ

「『』めんおじいちゃん、今すぐ買いにいつてくるー。」

どうやらおつかいを頼まれていたのを忘れていたようだ

そして鞄から財布だけを取り出し脱兎のごとく飛び出していく

・・・しゃあねえ

「美咲、オレも行く…じいちゃん、鞄よろしく…」

そう言いじいちゃんに鞄を投げ美咲の後を追う
じいちゃんは少し驚いていたがたいして中身へってないしだいじょ
うぶだらり

少し走ったところで美咲に追いついた・・・そう思つたら

ド「オオオオオオン…！」

「！？」

突然爆発のような音がしてその方向へ振り返る

「な、なんだ…？」

その先には煙がいくつも立つていた
なにがどうなつてんだ？混乱していると後ろから

「大和くん…！」

美咲が泣きそうな声でオレを呼ぶ
また振り返るとオレと美咲の間に田の前にオーロラのようなものが
出現していた

「なんだよこれ…？」

次の瞬間、そのオーロラがオレを包み込む

「なつ！？」

「大和くん！！」

美咲の叫び声を最後にオーロラに包み込まれたオレはあのときの夢の場所にいた

Hソード～日常の崩壊～（後書き）

いつも、激突皇です

第一話いかがだったでしょうか

次回からはティケイドらしくなっていきますので

未熟な作者ですがよろしくおねがいします、

ハピソード～記された力～（前書き）

就職試験オワタ

てなわけで、どうぞ

ヒュソード～託された力～

「…………」

オーロラに包まれたオレはどこかに飛ばされたようだ
最初こそあの時の夢の場所と思ったが
今いる場所はある無限に広がる闇の空間ではなく
代わりに無限といえる程の地球に似た丸い物体が漂っていた

「……選ばれし少年よ」
「…………」

声に振り返るとそこには黒いコートに白いマフラーを巻いたパツと
見20前半の青年が立っていた

「やつと会えたな、選ばれし少年　いや、芳野　大和」「
「あなたは……あの時の声の主ってわけか？」

そう聞くと青年はオレに近づいてきた

「ああ、そうだな……ツカサ、とでも読んでくれ
「なんか引っかかる言い方だな」
「いずれ話してやる、だが今は時間がない」

そういうとツカサと名乗った青年は丸い物体の一つに近づいていった

「今この無限に存在する世界に崩壊の危機が訪れている
「世界の崩壊……あの時も確かにそう言つてたがどうこう」となん
だ?」

「さつき、君のいた世界でなにか起こらなかつたか」

その言葉にはつとまる

「そうだ、美咲を追つてたら一きなり後ろから爆発が起こつたんだ」

「その爆発の原因こそ世界を崩壊させようとしている連中だ」

「なんなんだ？ その連中つてのは」

「まだ判らない、だが君の世界で行われている」といふや、世界の崩壊につながることなんだ

「どうこうことじだ」

その質問にツカサは丸い物体に手をかざしながら答える

「それぞれの世界にはそれぞれの物語がある。 だがそれが崩されることにより世界は簡単に壊れてしまつ」

オレは黙つて次の言葉を待つ

「それを知つた連中は次々と世界を破壊していった。 奴らの目的がただの破壊活動なのか、それともなんらかの目的があるのかはわからないが・・・」

「野放しにはできねえつてことか」

ツカサは黙つて頷き言葉を続ける

「そこで俺は君に白刃の矢を立てた」

「オレに・・・？」

「ああ、理由は判らないが君の身体にこの力が適合したんだ」

「これは・・・」

ツカサの手には九つの不思議なシンボル刻まれた箱のようなものと
ファイルのようなものがあった

「『ディケイドライバー』と『ライドブッカー』、救世主の力の象
徴だ」

「救世主の力・・・」

ツカサに手渡され、ディケイドライバーとライドブッカーを受け取った

「使い方等は頭の中に入っているはずだ」

「・・・ホントだ、使い方が判る」

てかなんでわかるんだ?

そう思つていると突然世界が歪む

「なんだ!?」

「時間切れか、大和!」

ツカサの声と共にさつきのオーロラが現れる

「君を元の世界へ戻す、その力で奴らの野望を阻止し、世界を救つ
てくれ!」

「・・・」

オレは目を閉じそして

「それはオレにしかできないことなんだな」

この言葉にツカサは少し驚いていたがまた真剣な顔付きになり

「ああ、やつだ」

「ならやつてやるー。世界だらつがなんだらつがまとめて救つてやるー。」

オレのこの言葉にツカサはフツと笑い

「たのんだぞ、芳野 大和ー。」

その言葉を最後にオレは元の世界に戻った

だがそこはやつべきの場所じゃなく

「なんだよ・・・」れ・・・」

ボロボロになつていた商店街だった

「やあああー。」

この声は！

「・・・美咲！？」

Hピソード⑩ 託された力（後書き）

中途半端かもしだれませんがこれでいいのです

次回は美咲視点の物語です

大和が行つた後美咲は・・・という話です

ムソード～守ってくれる人～（前書き）

美咲視点でお送りいたします

では、どうぞ

ヒュード～守ってくれる人～

「そんな・・・」

目の前から大和くんがいなくなつた

「大和くん・・・」

私の大切な人がまた、いなくなつた

お父さんとお母さんが目の前で倒れている映像がよみがえる

「あ・・・ああ・・・」

涙が次々と零れる

ド、「オオオオオ！」

「つー？」

また爆発が起きた

正直動きたくなかったけどここにいたら巻き込まれるかもしけない

私は涙をぬぐい商店街へ向かうこととした

「大和くん・・・」

大和くんのことを思いつつ私は走り出した

「なこ・・・これ・・・」

商店街に着いた私は驚愕した

「助けてくれ―――！」

「いやああああ――」

「がはあつ――」

昨日までの賑わいはそこにはなく

灰色の鎧をまとったようなや力マキリのよつた怪物が人々を襲っていた

「そんな・・・これつて・・・」

目の前の出来事に混乱し後ろへ後ずさる

「！――」

「ひつ――」

怪物のいくつかが私に気が付き近づいてくる

「い、いや・・・

私が怯えるのも気にせず怪物たちが歩を進めてくる

「 わああああー..」

叫びながら私は思ひつきに駆け出した
それを追つよつて怪物たちも走り出す

恐い、助けて・・・

そう願い無我夢中で走る

でも私はここまで走ってきて体力もほとんどなくなっていたので
足がもつれてしまつて倒れてしまつ

「 わやわやー..」

立ち上がりうとあるけど恐怖と疲れで足に力が入らない
そして振り返るとそこには怪物が立っていた

「 ひつー..」

灰色の怪物が私に爪を向け、それを振りかぶる

私・・・死ぬのかな・・・

そう思つた私の頭に走馬灯のように今までの出来事が流れる

友達と一緒に遊んだこと・・・

学校でおしゃべりしたり勉強したこと・・・

家族でいろんなところへ行つたこと・・・

そして最後にお父さんとお母さんのお葬式のことを思い出した

「ぐすっ・・・おとうさん・・・おかあさん・・・」

私はただただ泣いていた

私をかばいお父さんとお母さんは死んでしまった
二人にもう一度と会えない、その事実に私はただ泣き続けるしかなかつた

「うう・・・うううう・・・」

そんなとき、泣いている私の手を誰かが握ってくれた

「うう・・・やまとくん・・・？」

大和くんだつた

おばあちゃんが拾つて育てているという男の子
そのときにはもう何度か会つていたから認識もあつたし一緒に遊んだりもしていた

そんな大和くんが涙を流しながら私の手を握つていた

「おれが・・・まもつてやる」
「え？」

「おれが……おじさんとおばさんのかわりに……おまえをまもってやるー。」

「大和くん……」

怪物が振り上げていた爪を振り下ろしそうとした

「……大和くん！――！」

田をつづり、名前を呼ぶ

「美咲に……手え出すんじゃねええええええええええ――！」

ドカア！

「――？」

その声に目を開け前を見ると

怪物は奥に倒れていて

代わりに一人の男の子が立っていた

そこには今一番聞きたかった声が・・・

「ふう・・・」

今一番見たかった姿が・・・

「大丈夫だったか」

今・・・一番会いたかった人が・・・

「美咲」

大和くんがいた

ハピソード⑩「守ってくれる人」（後書き）

大和・・・自分で書いといてカッケエなオイ

てなわけでいかがでしたか

次回はついに大和が変身します

ムソード～戦士の力～（前書き）

ついに大和の変身＆戦闘です
少し長いかもせんが、どうぞ

HPSOード～戦士の力～

「ふう・・・」

全速力で走り、その勢いで灰色の怪物を殴り飛ばした大和は拳を握つたまま他の怪物の前に立つ

「大丈夫だつたか」

そして助けた少女の方へ振り返り

「美咲」

その名を呼んだ

「大和・・・くん・・・？」

美咲はその存在を確認するように名前を呼んだ

「ああ、そうだぜ お前のよく知る芳野 大和だ」

そう大和が言うと美咲の目から涙が流れ出した

「なつ、どうした！？ どうかやられたのか！？」

突然美咲が泣き出しだので大和は異様なほど慌てだした

「ひん、違うの」

その言葉に大和の動きはピタッと止まる

「突然目の前から大和くんがいなくなつて、もう会えなくなつちゃうんじゃないかって思つて。でも来てくれた、また私を助けてくれた。また・・・会つことができた」

「美咲・・・」

「それがうれしくて・・・」

そう言いながら美咲は涙をぬぐつ
大和はフツと笑いその頭をなでる

「あつ・・・」

「オレはお前をおいていなくなつたりなんかしねえよ」

大和はなでていた手を放し、美咲が顔を上げ大和の顔を見上げる

「あの時約束したる、オレがおじさんとおばさんの代わりにお前を守つてやるつて」

「・・・・・」

大和がそう笑顔で言うと美咲は顔を赤く染める

(覚えててくれたんだ・・・)

あの時自分を救ってくれた言葉を覚えていたことに美咲は喜びを覚えていた

「さあて、待たせたなてめえら」

言いながら大和は振り返り怪物を睨みつける

彼が殴り飛ばした怪物もすでに立ち上がり大和を睨みつけている様に見えた

「こいつを襲おうとしたんだ・・・てめえら、命の保障はねえぞ」

そう言った大和はポケットにしまっていたディケイドライバー腰にかざす

するとドライバーからベルトが出てきて大和の腰に巻きつくそれを確認してからバックルを開きベルトの左側にライドブックルを取り付けカード一枚抜き取った

そのカードには顔に七本の縦線が入っており緑の目とマゼンダ色のボディーをした戦士が描かれていたそれを目の前に突きつけ

「いくぜ、変身！」

その掛け声と共にカードを裏返し開いたバックルに差し込み、バックルを閉じた

『KAMEN RIDE DECADE!』

電子音のような声が響き、大和の周りに九つの人型の影が出現しバツクリから七枚の赤いプレートが飛び出る

そして人型の影が大和に集まりその体を包み込む

そして赤いプレートが仮面に突き刺さり体の透明な部分をマゼンダ色に染める

最後に目が緑色に光り、大和はカードに描かれていた戦士

「仮面ライダー・ディケイド」に姿を変えた

「大和・・・くん・・・？」

「美咲、危ないながら少し下がって！」

美咲は戸惑いながらも頷き後ろへ駆け出す

「ああ・・・いくぜ！」

拳を握り、大和・・・いや、ディケイドは怪物に向かって走り出す
そしてさつきの灰色の怪物にまたパンチを叩き込む
後ろから虫のような怪物が攻撃を仕掛けるもそれをかわし逆に蹴り
を入れる

だがもう一体の灰色の怪物に攻撃を食らってしまう

「ぐつ・・・」

ようめくも体制を立て直し相手を見直す
すると頭の中に情報が流れ込んでくる

「灰色のがオルフェノクで虫みたいなのがワーム・・・か」

怪物の正体が判り、ディケイドはカードを抜き取る

「先にオルフェノクからやるか」

バックルを開き抜き取ったカードを差し込みバックルを閉じる

『KAMEN RIDE FAIR!』

するとバックルにギリシャ文字の「に似たマークが浮かび上がり
ディケイドを別の姿、体中に赤いラインの入った「仮面ライダーフ
ァイズ」に変えた

「また変わった・・・？」

遠くで美咲が驚く
そして二体のオルフェノクに攻撃を当てひるませてからまたカード
を抜き取りバツクルに差し込む

『FORM RIDE FAIZ! ACCEL-!』

ディケイドファイズ（以下Dファイズ）の胸の部分が開きファイズ
アクセルフォームへ変わる
そして腕のスイッチ押す

『Start Up』

その電子音が合図にDファイズが超高速で動き出し二体のオルフェ
ノクとワームに攻撃を当てていく

「こいつでとどめだ！」

再びカードを抜き取りバツクルに差し込む

『FINAL ATTACK RIDE FA'FA'FA'FA'FA
IN!』

刹那、二体のオルフェノクとワームの周りに赤い三角錐のフォトン
ブラッドが現れ目にも止まらぬ速さで突き刺さる

「うおうあーー！」

『3・2・1・・・』

『Time Out』

電子音が鳴り終わると共にロファイズが現れ、開いていた胸の部分が閉じ元のファイズへ戻る

それと同時に一体のオルフェノクはファイズの紋章が浮かび上がり灰となつた

するとバツクルが勝手に開き中からファイズのカードが飛び出しティケイドの姿に戻つてしまふ

「なんだ？」

飛び出したカードを見るときまで描かれていたファイズの絵が消えていた

「大和くん！ 危ない！」

後ろからの美咲の声に振り返ると田の前にワームがいてティケイドに腕の鎌を振り下ろした

「ぐあつ！」

避けきれず攻撃を喰らうもまた体制を立て直しワームに殴りかかる

「ぐつ・・・このー」

だがその直後さつきのロファイズアクセルフォームのようにワームが超高速移動する

「なに！？」

そしてまた攻撃を喰らつてしまつ

「がはっ！」

そして思い出す、さつき見たワームの特徴を

「クロックアップか・・・ならー！」

また新しいカードを取り出し、差し込む

『KAMEN RIDE KABUTO!』

するとバックルにカブト虫のような紋章が浮かび上がり
ディケイドをカブト虫に似た戦士、「仮面ライダー・カブト」へ変える
そしてすぐさま別のカードを差し込む

『ATTACK RIDE CLOCK UP!』

再び超高速移動をするディケイドカブト（以下ロカブト）
そしてクロックアップしていたワームと鉢合わせる

「！？」

「悪いが虫は好きじゃないんでな、ひとつと決めさせてもらひやー！」

そう言い、新たにカードを差し込む
そしてワームがロカブトに向かって飛び掛つてくる

『FINAL ATTACK RIDE KA-KA-KA-KA-KA
BUTTO!』

バツクルから頭の角へ、角からロカブトの右足へエネルギーが流れ飛び込んできたワームにロカブトは回し蹴りを叩き込む

「おらあ！！」

回し蹴りを喰らったワームはその場で爆発し、そして

『CLOCK OVER』

クロックアップの効果が切れ、またバツクルが開きカードが飛び出てきて
ディケイドの姿に戻った

「またか・・・」

そしてカブトのカードもまたなにも描かれていなかつた
もう回りに敵がないことを確認すると
再び閉じていたバツクルを開き変身を解除した

「大和くん！」

後ろで避難していた美咲が大和が変身を解除したのを確認してから
駆け寄つてくる

「これでひとまず大丈夫なはずだ」

ドライバーをポケットにしまいながら美咲の方へ振り向く

「うん・・・でも今のつて・・・」

「ああ、後で話す。それよりじいちゃんが心配だ、家に戻ろう」

「う、うん」

二人は望月写真館に向けて走り出した

途中怪物に出くわしたが別のカードを駆使し倒した

だがやはりディケイド以外のカードは使った後何も描かれてなかつ

た

Hピソード～戦士のかへ（後書き）

ついで、戦闘シーン入れたりあと長くなってしまった

次回はHピソードの完結の予定です。

Hピソードの終わったら新しい小説書をたいな・・・

HUNTER×HUNTER ~始める物語~ (前書き)

HUNTER×HUNTER、完結！

ウイーナー・ハーブ

H.Pソード～始まる物語～

『FINAL ATTACK RIDE A·A·A·AGIT

「おらあー。」

ディケイドアギト（以下Dアギト）の跳び蹴りが炸裂し怪物、アンノウンが頭の上に天使の輪のようなものを浮かべた後爆発したそしてDアギトの腰のバッклルが開きディケイドを除くカメンライドカードの最後の一枚、アギトのカードがバッклルから飛び出し、描かれていた戦士の絵が消える

「これで最後・・・結局こいつ以外全部使った後絵が消えちまつたな」

ディケイドのカードを見つめながらアギトのカードをライドブッカーにしまいそう言つ

「美咲、もう大丈夫だぜ」
「うん・・・」

大和にそう言われ物陰に隠れていた美咲が駆け寄るここまで來るのに幾度も怪物達に襲われその度大和が倒していく美咲が大和の隣に並んだのを確認すると大和は歩を進めた

少し歩くと自分達の目的地、望月写真館に着いた

「さて、やつと着いたな」

そう言いながら自分達の住む家を見上げる
すると隣にいた美咲が大和に寄りかかる

「美咲？」

「『めん・・・少し疲れちゃつた・・・』

無理もない、突然いくつもの怪物が出現し、それを家族同然に育つ
た大和が倒すという非日常に遭遇したのだから
もともと体力の多くない美咲にはかなりきついものだった

「無理すんな、もう家なんだからとつと入つて休んだ方がいい」
「うん、ありがとう・・・」

寄りかかった美咲に肩を貸して大和は自分達の家に入る

「ただいま、じいちゃん」

「ただいま、おじいちゃん・・・」

「おお大和くん、外が騒がしかつたけど何かあつたのか・・・って
美咲、どうしたんだい？」

奇跡的に宗太郎は写真館から一歩も出でていなかった

「ちといろいろあつて疲れたんだ、部屋で休ませてくれる」

「そうかい、何があつたかは後で教えてくれればいいからそうして
やつてくれ」

宗太郎の言葉に頷き大和は美咲を部屋につれていった

美咲を部屋のベットに寝かせると大和はその辺にあつたクッションに腰掛ける

「ありがとう、大和くん」

「気にはすんな、何か欲しいものとかあるか?」

「ううん、大丈夫・・・」

「そつか・・・」

「・・・」

二人に気まずい沈黙が流れる

その沈黙に耐えられなくなつたのか大和が

「ええっと、とりあえずなんか飲み物持つて来るな」

そう言い立ち上がるうとすると

「あつ、待つて!」

美咲が手を掴みそれを制する

「な、なんだ?」

「あつ、えつと・・・その・・・」

理由もなしに引き止めた美咲は戸惑い、少し考えそして

「り、りんごジュースが欲しい・・・な」

「・・・」

思いがけない言葉に大和は固まり

「ブツ！」

「え？」

「あつはははははは！」

壮大に大笑いした

「ふえ！？」

大和の笑い声に今自分がどんなことを言つたのかを思い出し美咲は顔を真っ赤にした

「ちょ、ちょっと！そんなに笑わないでよ～！」

「ははは、すまんすまん。なんつーかさ、気が抜けてさ」「む～、どうこうこと？」

美咲をなだめ、大和は腰を再び下ろす

「いや、いきなり世界を救えとか言われたりあんな化けモンと戦つたりしてさ、正直気が重かつたんだ。でも今まで気が楽になつた」

「世界を救う・・・？」

「ああ、これから話す。でもその前に」

「？」

ワンテンポ置いてニヤツと笑いながら大和はこう言った

「りんごジュース持ってきてやる」

その言葉に美咲は再び顔を赤くし

「もう！大和くん！」

怒る美咲に笑いながら大和はジュースを取りに行つた

戻ってきた大和は美咲にジュースを渡し、自分も飲みながらあの場所でのことを美咲に説明した

「・・・で、オレにそのディケイドの力が適合したってわけだ」

「救世主の力、ディケイド・・・」

「ああ、んでその力で世界の崩壊を阻止できるってことだ」

一通り話しあると手に取っていたジュースを一気に飲み干した

「ふうん・・・なんか、大変なことになつてたんだね」

「でもオレにしかできないことなんだ、やるつきやねえだろ」

「・・・そのとおりだ・・・」

「「？」」

突然部屋に声が響くと二人をあのオーロラが包んだ

「えつーー」「どこーー？」

「ここは……さつき言った場所だ。んで、今の声は……」

声の主を探し、大和はキヨロキヨロと見回す

「ここちだ、大和」

その声に一人は振り返る。するとそこには

「思つたより早い再会だつたな、ツカサ」

大和に『ディケイドの力を託したツカサがいた

「え？ この人が？」

「ほう、説明したのか。聞いてのとおり、俺がツカサだ」

ツカサは美咲の方を向き自己紹介をした

「あ、は、はじめまして！私は望月 美咲です」

美咲も自己紹介をし頭を下げた

「んで？ 今度はどうした？」

「うむ、それは君達に伝えておくことがあってな」

その言葉に一人は耳を傾ける

「まず一つ、大和、君の活躍で君達の世界は崩壊の危機から救われた」

「なに？ ホントか？」

「ああ、君があの怪人たちを倒していなければそのままあの世界は崩壊していた」

その事実に美咲が質問する

「で、でも大和くんが倒した怪物以外にもたくさんいましたよ。それでも救われたんですか？」

「そこで二つ目だ、世界の救世主とされる『ディケイド』が現れたことで奴らがそれを脅威と感じ始めた」

「ん？ それとオレ達の世界が救われたのとどういう関係があるんだ？」

「つまり『ディケイド』といつこれまでにない脅威に奴らも分が悪いと判断したのだろう、それでの世界の破壊を捨て退散したというわけだ」

「なるほどな」

大和は納得し、ふとあることを思い出す

「そういう『ディケイド』以外のカードが使った後得が消えたんだがあれってどういうことだ？」

「それが三つ目だ」

ツカサはそう言つと一人に背を向け地球のようなものに歩み寄る

「『J』の無限に存在する世界、その全てが君達の世界のような平凡な世界とは限らない。科学がとてもない進歩を遂げた世界、科学のかわりに魔法が栄えた世界、また、その二つが両方ある世界と様

タだ。」

そんな世界があることに一人は少なからず驚いていた
その二人を差し置いてツカサは話を続ける

「だが全てが平和であるとは限らない、一つの大きな力をめぐり戦争する世界、奴らのような連中に支配された世界、人類とモンスターが争いを続ける世界だつてある」

そんな事実に一人はまた驚き大和は眉を潜め美咲はつらい顔になった

「そんな様々な世界に存在する人のために戦う戦士、『仮面ライダー』。その中の九人の力を使い、戦うライダー、それが・・・」「『仮面ライダー デイケイド』、世界の救世主つてわけか」「ああ、そのとおりだ」「んで、その九人の力つて奴は無くなっちまつたみたいだが?」「それは、その九人のライダーは今はいないからだ」「なんだつて!?」

大和だけでなく黙つて話を聞いていた美咲も驚愕する

「んじゃあオレは『ティケイド』の力だけで戦わなくちゃなんねえってことか!?」「いや、そうじゃない。たしかに九人のライダーはもういない、だがその力は各世界の少年達に受け継がれている」「どういうことだ?」「つまり」

ツカサは一人に向かつて振り返りこう言った

「その世界のライダーと力を合わせ、その世界を救え。 そうすればその世界のライダーの力がカードに宿る、というわけだ」

そのスケールでのかい目的に大和は少し驚くが元の表情に戻り

「なるほど、んでその世界とやらにはどうやって行くんだ？」

「それは君達の住む写真館を使つんだ」

「家を？」

「うむ、かつてのティケイドも使用した方法だ」

「かつてのティケイド？ そんなのいたのか？」

「ああ、といつても昔の話だ。 僕も存在したというじとぐらいしか知らない」

「あの、それでどう写真館をつかうんですか？」

「背景ロールを使うんだ」

「背景ロールってあの写真を撮るとき背景を変えるのがあれか」

「ああ、それを回すことと別世界へ行くことができるよ！」にしておいた

「しておいたって、何かしたんですか？」

「すこし君達の家に手を施した」

「あんた人に黙つてなにやつてんだ」

「いやすまない、緊急事態だつたものでな」

謝りながら再び一人に近づく

「とまあこれで君達に伝えることは全て伝えた。 最後に大和、君

にもう一度聞いておく

「なんだ？」

「奴らの野望を阻止し、世界の崩壊を防いでくれ！」

その言葉に美咲は大和の方に顔を向ける

その大和はニヤツと笑い、真っ直ぐツカサを見つめこいつ言った

「いいか、よく聞け！ 一度決めたことは絶対に貫き通す…それがオレだ！！ 何度も聞かれてもやつてやるつて答えてやるよ…」

ツカサはそのセリフにフツと笑いオーロラを一人の近くに発生させる

「そうか、なら頼んだぞ。 芳野 大和！」

そして目の前からオーロラが消えると一人は元の部屋に戻っていた

「戻った……か
…………」

美咲は少し暗い顔つきでベッドに腰掛ける

「ねえ、大和くん
「ん？ なんだ？」
「私に、できること……あるかな？」
「…………」

その言葉を聞くと大和は真剣な顔になった

「私はその・・・救世主の力とかそういうのは無いし、戦うことはできないけど・・・」

「美咲・・・」

「それでも、私は大和くんの力になりたい！」

そう言う美咲の顔はとても真剣な顔だった
そして大和はその美咲の頭に手を置く

「だつたら、一つだけ頼まれてくれねえか」

「？」

「オレが戦いに行つてる間、帰りを待つていてくれ」

「え・・・？」

その言葉がどういう意味なのか判らず声を上げる
大和は頬を搔きながら照れくさそうに

「いやさ、自分の帰りを待つてくれる人がいるとき、なんか落ち着くだろ。だからさ、本読みながらでも、飯作りながらでもいいから待つてくれ。」

「大和くん・・・私待つよ！大和くんが帰るの！」

「ああ、頼んだぜ、美咲」

「うん！」

二人は真剣な顔から笑顔に戻っていた

「おや、美咲、もう大丈夫なのかい？」

一人が下に降りると宗太郎は夕食を作っていた

「うん、それより材料足りる?」

「なあに、店の余り物を使えばなんとかなるさ」

「そつか」

「なあ、じいちゃん。あの背景ロールってやつ使えるか
ん?たしか使えるはずだよ。でもなんでまた?」

「いや、ちょっとな」

「そうかい、あれは自由に使ってかまわないよ」

「ありがとう、じいちゃん」

「それより一人とも、これを運んでくれ

「あいよ

「はーい」

「さて、これが」

夕食を終え、大和と美咲は例の背景ロールの前にいた

「これを回すと別の世界に行けるんだね
「あいつの言つことが正しけりやな、んじや、いくぞ」

大和は背景ロールを回す鎖を握る

「あ、待つて」

そう言い美咲も鎖を握る

「よし、セーの！」

二人で一緒に鎖を引く、すると背景ロールの絵が変わる

「これは・・・」

そこには古代遺跡のような場所に大きく描かれた古代文字があつた
その絵を見た瞬間、大和の頭に情報が流れ込んでくる

「『クウガの世界』・・・か」

一人の少年と一人の少女の世界を救う旅が、今始まった

次回、仮面ライダー“ディケイド Another

「これがクウガの世界か」

「ふええ、他の世界でも学校に通うんだ」

「俺は一之瀬 勇樹つてんだ、よろしくな！」

「未確認生命体出現！」

「変身！」

「こいつがクウガ・・・」

全てを紡ぎ、未来へ導け！

Hピソード～始まる物語～（後書き）

ちょっと詰め込みすぎたかな
だがついにHピソードの終了！
次回からHピソードクウガが始まります

番外編 ～キャラ設定～（前書き）

いつも、作者の激突皇です

今回は番外編といつもとキャラ設定の回をお送りします

番外編 ～キャラ設定～

ではまず主人公の大和から

名前 / 芳野 大和（よしの やまと）

性別 / 男

年齢 / 17歳

職業 / 高校一年生・仮面ライダー“ディケイド”

身長 / 170cm

体重 / 58kg

容姿 / 髪は黒で所々はねている

少し痩せ型の体系で本人はもう少し筋肉を付けたいと思っている

その他概要

正義感が強く困っている人はほつとけない性格、しゃべり方が少しがさつでなにかあるとすぐに首を突っ込むため不良に絡まることが多い。 （故に多少ケンカ慣れしている）

基本的に恐いもの知らずだが犬ときのこと女の子（特に美咲）の涙は苦手。

思ったことをストレートに言つので普通は恥ずかしくて言えない

ようなことも平然と言つてしまつが逆にそこに惹かれて彼を慕う者も多い。

ずっと一緒に育つってきた美咲のことを意識しているが恋愛の類に疎い為本人は気づいてない。

名前 / 望月 美咲（もちづき みさき）

性別 / 女

年齢 / 17歳

職業 / 高校一年生

身長 / 158cm

体重 / 本人の強い希望のため省略

容姿 / 髪は茶色っぽい黒でストレート

スタイルはそこそこよく胸は「Dぐらいあるんじゃねえの」とのこと（大和談）

その他概要

心優しく気弱そうに見えて意外と物事をはっきり言つ性格。

幽霊の類と雷が苦手で遭遇するとすぐに涙目になる。

家事はたいてい得意で特に料理は絶品。

周辺の人（大和以外）に認知されるほど大和に好意を寄せている

がかなりの奥手でその思いは伝えられずでいる。

名前 / 望月 宗太郎 (もちづき そうたろう)

性別 / 男

年齢 / 63歳

職業 / 望月写真館オーナー

身長 / 165cm

体重 / 45kg

容姿 / 髪のほとんどが白髪

眼鏡とセーターを常時着用している

その他概要

だれにでも優しく非常におおらかな性格をしている。

彼の淹れるコーヒーは非常に美味でファンも多い。

親のいない一人を自分の子供同然に育てなによりも大切にしている。
また一人からも強く信頼されている。

名前 / ツカサ

性別 / 男

年齢 / 不明

職業 / 不明（後に明かされる予定）

身長 / 約175cm

体重 / 不明

容姿 / 見た目は20代前半
髪は黒で整っている

その他概要

全てが謎に包まれた青年で大和に世界の崩壊の事実を伝え、ティケイドの力を託した張本人。
クールに見えるが意外と熱いところもある。
世界の崩壊を防ぐことに全てをかけている。

とまあ今は以上です

主要キャラが増える度にこういった番外編をやっていくと思います

では

エピソードクウガ 第一章 ～世界の巡り方～（前書き）

てなわけでクウガ編、始まります

ヒソードクウガ 第一章 ～世界の巡り方～

「『クウガの世界』か・・・」

頭の中に入ってきた情報をつぶやく大和
それが気になり美咲が大和に質問する

「クウガ・・・って？」

そう聞かれた大和は情報を読み取るのに集中するため、人差し指を額に当て答えた

「クウガ、現代に蘇った古代の戦闘種族、グロンギを倒すため超古代民族リントが作り出したベルト、アーフルにより変身し戦う戦士、だそうだ」

額から指を離し、美咲に顔を向けながら言つ

「へえ、ディケイドとはいいろいろ違うんだね」

「ああ、たしかそれぞれの世界にはそれぞれの物語があるとか言ってたから仮面ライダーって概念もそれぞれ違うんだろうな」

そう言つと大和は背景ロールから離れ近くの窓を開け、外の景色を見る

「・・・つーか家」と移動すんのかよ

「え？」

美咲も窓から外を見る、するとそこには今まで見えていた景色はなく全く別の景色が広がっていた

「うわー、ホントだー」

「これがクウガの世界か」

美咲は窓から見える見たことのない景色に食いつき、大和は自分達の世界とほとんど変わらないもののなにか違う雰囲気にそう呟いた

「まあ、こんな時間だし行動すんのは明日からになりそうだな」

大和は窓から離れ、側にあつた椅子に腰掛けた

「うん、そうだね。でもどうするつもりなの?」

美咲は窓の淵に腰掛け大和に聞く

「あー、考えてなかつた」

「ええ・・・」

大和の気の抜けたセリフに美咲は思わず窓の淵から落ちそうになつた

「まつ、明日飯食いながら考えよつや。ふわああ、つとそろそ
ろ風呂入つて寝るとすつか」

時計を見ると九時を指しており、大和は欠伸をして眠そうに部屋から出ようとすると

「もう・・・でも私も眠くなっちゃった・・・あふう」

美咲も同意しかわいらしく欠伸をした

「ん? なら先に入るか?」

「うん、 そうさせてもらいまーす」

美咲はそう言い眠るように浴場へ向かった

「わい、 どうすつかな」

とたんに暇になつた大和は美咲が出るまでの時間をじつ過ぐすかを考えていた

「ふう、そろそろ寝るか」

風呂から上がり部屋着に着替えた大和はしばらくいじつていた携帯を置き布団に向かつ

(にしてもいちでも携帯使えんのな)

そんなことを今更気がつきつつ布団に入りしつとしていると

「大和くーん」

美咲の間の抜けた声に動きを止める

「なんだ?」

といつあえず呼んでいるのに美咲の部屋に向かつ

「ンンン

「美咲、どうした?」

美咲の部屋のドアをノックして部屋の主を呼ぶ

「あつ、入つて入つて！」

なぜか急いでいた美咲にはてなマークを浮かべつつ部屋に入る

「一体なんなんだ？」

「これ見て！これ！」

そう言い美咲は大和に服を突きつける

「なんだこれ？制服？」

ぱっと見、学校の制服だが大和や美咲の通う高校のものではない

「多分そつだと思つけど、今までの制服の隣に掛かつてたの」

「つむ・・・一応オレの部屋も見てみよ！」

大和は美咲を連れ自分の部屋へと移動する

「こっちにもあった」

クローゼットを開くと今までの制服と別にもう一つの制服が掛かつっていた

「ん？なんだこれ」

制服を手に取ると一枚の紙切れが落ちたのでそれを拾う

「これは、ツカサから？」

そこにはこう書かれていた

『大和、美咲。君達に世界の巡り方を教えておく。』

「世界の巡り方？」

美咲がそう言い、大和は読み続けた

『君達の元にそれぞれの制服があるはずだ、その胸ポケットに生徒手帳と地図がある。』

そう読み上げた大和は掛けていた制服から生徒手帳と地図の紙を取り出す

『君達にはその場所に記された学校に通つてもらひ。』

「つて」

「「え――――――!?」」

二人は声を揃えて驚く

大和は驚きつつも読み続ける

『その学校にはその世界のライダーがいる、そのライダーと共に奴らによる世界の破壊を阻止するんだ。』

「「」の世界のライダーって「」とはちつとも言つたクウガって「」の
だよね」

「ああ、そのはずだが」

『転校の手続きはすでに済ませてある、その学校で自分の「」とを説明すれば問題ないはずだ。』

「ほんと何でもありだなオイ」

ツカサの手回しに突っ込みを入れつつ続きを読む

『最後に次の世界でもその世界のライダーがいる場所に行けるよう手を回しておくといつ「」とを「」に記しておく。では、検討を祈る。ツカサ』

「ふええ、他の世界でも学校に通うんだ」

「まあ、「」の世界でやる「」とは判つたつて「」ことだな」

大和は紙切れを丸め「」箱に投げ入れ制服をクローゼットに掛けた

「どうあえず明日転校つてことだし今日は「」あつたんだ、明日に備えてもう寝ようぜ」

「うん、そうだね」

そつ言い美咲は自分の部屋に戻つていく

「それじゃあ、おやすみ、大和くん」

「ああ、おやすみ」

大和はすでに布団に潜り込んでおり、美咲はそれを見て微笑みなが
ら自分の部屋へ戻つていった

ヒュードクウガ 第一章 ～世界の巡り方～（後書き）

クウガ編といつても今回はまだ日にあすら変わっていないという

次回は一人の転校とある少年との出会いです

このある少年とは・・・。いつまでもありませんね

エピソードクウガ 第一章 ～転校初日～（前書き）

てなわけで転校初日の話です

ヒュードクウガ 第一章 ～転校初日～

「これでよしつと」

大和は部屋で新しい制服を着ていた

今日はこの世界での学校に転校する日なのだった

「んじゃ、朝飯食いに行つか

朝食を摂るために部屋から出る

「あつ」

「ん?」

大和が部屋を出ると美咲も新しい制服に身を包み自分の部屋から出たところだった

「お、おはよう、大和くん」

「ああ、おはよつ

「えつと、ど、どうかな？」

美咲はもじもじしながら大和に聞く

「え？・・・ああ、変なことはないと思つぞ」

「ホント？ よかつた」

美咲はほっとしたように微笑む、それを無意識に大和は見つめていた
その視線に気づいた美咲は

「どうしたの？、やつぱ変なとこある？」

そう言わると大和は視線を逸らし頬を搔きながら

「あ、いや、なんか新鮮だなと思つてな」

「ふーん？」

「それよつとつとと飯食おうぜ」

「あ、うんそうだね」

二人は朝食を摂るために下の階へ降りた

「そう、あなた達が今日転校するつていう芳野大和君と望月美咲さんね」

学校に着いた二人は転校の手続きの為職員室へ来ていた

「わかつたわ、それじゃあ一人のクラスへ案内するわね」

「はい」

「よろしくお願ひします」

教師に導かれ新しいクラスへ向かう

「いいよ、ちょっと待つててね」

そう言い教師が教室へ入っていく

『はい、席に着きなさいーホームルーム始めるわよ』

「うう、緊張するね・・・」

大和の隣で美咲が不安そうに言つ

「まあ入学したときみたいにやれば大丈夫だろ、なんかあつてもオレがなんとかしてやつから」

「うん・・・」

『えー、最後にこのクラスに転校生が来ることになりました』

その教師の言葉に教室はドッと騒ぎ出す

『はいはい静かに！それじゃあ一人とも、入ってきて』

「んじや、いくか」

「う、うん・・・」

一人は教室のドアを開け入っていく、すると教室がざわつきだす

「それじゃあ二人とも自己紹介をよろしく」

「はい」

先に大和が一步前に出て自己紹介する

「芳野大和です、よろしく」

自己紹介が終わり大和は一步下がる

教室からは、ちょっとかっこよくなかったとか、えーそつ?とか言つ

声が聞こえた

そしてこんどは美咲が一步前へ出る

「え、えと、望月美咲です、よろしくお願ひします」

そう言つてペコリと頭を下げる

教室からはまた、かわいくねあの娘とか、ああかわいいよなとか聞こえた

「えー一人は家庭の事情で少しの間この学校に通うことになりますた、皆仲良くしてあげてね」

教師の言葉に生徒ははーいと答えた

(なんかおもしろいクラスだな)

その光景に大和はそう考えていた

「はい！ てなわけで転校生に質問のコーナー！」

一時限目の授業が終わると二人の周りにクラスのほとんどの生徒が集まっていた

「・・・・・」

「ふえ、え？」

この状況に大和は唖然とし美咲はおろおろしていた

「さあみんな！ この二人に質問はあるか？」

「どこから来たの？」

「趣味は？」

「どんな異性がタイプ？」

「二人つてどんな関係？」

「俺と付き合つてくれ！」

生徒の一言で二人は質問攻めにあつ

(てか一人おかしいのがいるぞ)

大和は心の中でツツ 「なんだ

「ふええ！ あの、えと、あの～～」

美咲はいくつもの質問にあたふたしていたのだった

「やつと昼か・・・」

午前の授業が終わり昼休みになつた
あの後も休み時間になるたびに質問攻めを受けていた一人は少々ぐ
つたりしていた

「よつ 転校生」

声をかけたのはさつきの質問攻めには参加していなかつた生徒だつた

「ん? 何か用か」

声をかけた生徒に体を起こしつつ聞き返す

「いやな、お前ら転校してばっかで学食とか場所わからんだろう、だから案内してやるうと思つてな」

「ああ、そいつは助かる。 美咲はどうする」

大和より多少ぐつたりしていた美咲も体を起こし答える

「うん、私もいくよ」

「よし、んじゃついてきな」

「やつこやお前名前は？」

聞かれた生徒は振り返り

「俺は一之瀬 勇樹つてんだ、よろしくな！」

と爽やかな笑顔で答えた

エピソードクウガ 第一章 ～転校初日～（後書き）

クウガ編の主要人物の一人、勇樹の登場です
次回はついに事件が起こるかもです

ヒソードクウガ 第一章 ～気せくな兄妹～（前書き）

大和達と勇樹が仲良くなつていきます
では、どうぞ

HPSOードクウガ 第一章 ～気さくな兄妹～

昼休み、大和と美咲は一之瀬勇樹と名乗る少年に連れられ食堂へ向かっていた

「まあ、あいつらを悪く思わないでくれや、よそから来たのがめずらしげだけだつたんだ」

「別にんなこと考えてねえよ、ただ少し疲れただけだ」

勇樹はすぐに大和と意気投合したらしく親しげに話していた

「お兄ちゃん～ん！」

「ん？おひ、綾香～」

勇樹をお兄ちゃんと呼んだ少女は小走りでこちらに向かつてきた

「お兄ちゃんもこれから？」

「ああ、お前もか」

「うん！あれ、その人たちは？」

少女が大和と美咲を覗き込む

「ああ、今日クラスに転校してきたんだ」

一人は一步前に出て少女の前に立つ

「芳野大和だ、よろしく」

「望月美咲です、よろしくね」

「はい！あたしは一之瀬 綾香あやかです。」さういふよろしくおねがいします！」

三人の自己紹介が終わると勇樹が手を叩き注目させる

「はいはい、自己紹介が終わつたとこりでそろそろ行こうぜ、座れなくなつちまう」

「おつと、やうだな」

こつして四人は食堂へ再び歩を進めた

「へえ、お二人は一緒に住んでるんですか」

「つつてもオレは居候みたいなもんだがな」

なんとか席と昼食を確保できた大和たちは他愛もない話をしていた

「そういうやお前らつて家庭の事情とかでこいつに来たんだろ、親はどんな仕事してんだ?」

その言葉に大和と美咲の箸が止まる

「親は・・・」

「・・・死んでるよ」

「「えつ?」」

素つ気なく言った大和の言葉に一人の箸も止まる

「オレたちがまだ小さい頃に事故で死んだ」

「そ、そつか・・・なんかすまんな」

ばつが悪そうに勇樹が言つ

「気にはんな、初めてじゃねえんだ」

「本当にすまん」

「気」にすんなつーの、ほら、うびん伸びるわ

「あ、ああ」

しばらく氣まずい空気が流れたがすぐにまた他愛のない話に戻った

「終わった・・・」

一日の授業が終わり生徒達は帰りの支度をしたり部活の準備をしたりしていた

「大和！」

大和も帰りの支度をしていると勇樹に声を掛けられた

「お前も帰るだろ、だったら一緒に帰るわ」

「ああ、いいぜ、美咲も帰るだろ？」

「あ、私はお使い頼まれてるから先に帰つてて」

「んじゃ俺も付き合つぜ、大和もそいつするだろ」

「ああ、でもいいのか？」

「いいさ別に、そうだ、確か綾香も買い物があるとか言つてたし、
いつそ商店街も案内するぜ」

「本当? 助かるよ」

「んじゃ、綾香に伝えてくるから校門で待つてくれ」

「わかった」

そして勇樹は走つて教室を出でつた、大和と美咲も鞄を持って教室
を出た

「ありがとう、勇樹くん、綾香ちゃん、おかげで頼まれたものが
買えたよ」

「いいいじことよ、俺たちはも'つ友達だろ」

「そうです、私達は同じ釜の飯を食べた友なのです」

「いや、学食で一緒に飯食つただけだろ」

商店街で買い物を終え四人は帰り道を歩いていた

「あ、そうだ、お前達に聞きたいことがあるんだが」

「ん? なんだ」

途中大和が一之瀬兄妹に聞き出した

「実は・・・」

言いかけたところで警報が鳴り出す

「なんだ!?」

『未確認生命体出現! 今すぐに非難してください!...繰り返します・』

「未確認生命体・・・つて」とは

「グロンギー！」

「あ、おい！勇樹！」

放送を聞いたとたん勇樹は走り出す、そしてそれを大和たちも追い掛けた

とある工場の前、グロンギは警察の発砲をものともせずにいた

「くっ、やはり効かないっ」

「ジャラゾグスバ」

謎の言葉を発し警官に襲い掛かる

「うわあー。」

「「どうやあーー。」」

そこに大和と勇樹が飛び蹴りを入れグロンギを突き飛ばす

「つで、なにやつてんだ大和！？お前は下がつてるー。」

「そういうな、オレは強いぜ。お前にそ下がつてな」

「強い」という問題じゃねえー。」

そして言い合いを始めた

「とにかく下がつてろー。俺がやるー。」

「あ、おーー。」

大和を後ろに下げ勇樹が前に出る、そこに美咲と綾香も到着する

「はあはあ、一人とも速いよ・・・。」

「ふう、さあ大和さん美咲さん、下がつてくださいー。」

「つてお前もかよ、なんだ、勇樹に何ができるつてんだ？」

「まあ見ててくださいー。」

「 「？」

そう言われ一人は勇樹に注目する

「さあ化け物め！俺が相手だ！」

グロングギに宣戦布告すると勇樹は腰に手をかざす

「な！？」

すると勇樹の腰にベルトが出現した、そして右手を左肩の前に突き出しそれを右にスライドさせていった

「変身！」

そして左腰のスイッチを右手で押した
すると勇樹の体が変化しこの世界の仮面ライダー、クウガに変身した

「つそ！？ 勇樹くんが！？」

「こいつがクウガ・・・」

「こつけえ！お兄ちゃーん！」

大和と美咲は驚き綾香は変身した兄を応援していた

「いぐぞー！」

そう叫び、クウガはグロングギに突っ込んでいった

ペソードクウガ 第一章 ～気さくな兄妹～（後書き）

一之瀬兄妹はこれからどう関わらせていくか、考えどころです
そして次回はクウガとグロンギの戦いです
ちなみにグロンギ語は一応調べました

ハルソードクウガ 第一章 ~古代の戦士~（前書き）

ひとまずで区切つをつけて
では、どうも

ヒュソードクウガ 第一章 ～古代の戦士～

「おりやあー」

変身した勇樹、クウガがグロンギに殴りかかり戦闘が始まった

「はーおりやーどおりやあー」

クウガはパンチやキックを次々とグロンギに叩き込む、だがグロンギもやられっぱなしではなかつた

「ギギビジバスバ」

「つおー?」

グロンギはクウガを殴りそれを受けたクウガは一瞬ひるむ

「いのやー」

体制を立て直すとクウガは落ちていたパイプを手に取る

「超変身ー」

再びベルトに手をかざすとクウガの体とベルトの赤い部分が青く変わり「デカポンフォーム」に姿を変えた

「色が変わったー?」

「あれがドラゴンフォームか」

その光景に離れて見ていた美咲と大和はそれぞれの反応を示していた

「『ドラゴン』何ですかそれ？」

そして隣で応援していた綾香は大和のセリフについて聞く

「クウガにはいくつかの姿がある、さっきまでの赤い姿は格闘戦に特化した「マイティフォーム」、今の青い姿は俊敏性が強化された「ドラゴンフォーム」、他には緑の姿の超人的な感覚神経を持つ「ペガサスフォーム」、紫の姿の攻撃力と防御力が高い「タイタンフォーム」、他にもあるらしいが基本的にはこの四つを使って戦うようだ」

大和は綾香の質問に頭の中の情報を読みながら答える

「へえ、詳しいんですね大和さん。警察や科学者でも知らないようなクウガのことたくさん知ってるなんて」

「まあ、ちょっといろいろあってな」

その辺は知られるといろいろ面倒なので濁した

その間にクウガは持っていたパイプをドラゴンロッドへと変化させグロンギに突っ込んだ

「大和くん、勇樹くんが持つてたパイプが変わったよー！」

「あれはクウガの能力だ、マイティ以外の姿はその姿によって手に持つた物を自分専用の武器にできるんだ。つってもその形に近い

ものしかできないけどな」

今度は美咲が聞いてきたので大和は答える

「あー工場の中に入つていつちやつた」

クウガとグロンギは戦いながら工場の中に入つていつた

「オレ達も行くぞ」

大和が工場に向かい美咲と綾香もそれに続いた

「はあああああーはあー！」

ドランロッドで次々と攻撃していくクウガにグロンギは押され気味だった

「ブ・・・ボボララゼザー！」

身の危険を感じグロンギは逃げようとするがクウガに回り込まれる

「これで終わりだースプラッシュショードラゴンー！」

グロンギはドランフォームの必殺技を喰らいその体にクウガの紋章が浮かび上がる

「ズゴ・・・ブガガ！」

そして断末魔と共にグロンギは爆発した

「よし、いつちょ上がり・・・」

「後ろにまだいるわ！」

「なに！？」

ドリ「ンロッドを地面に突き勝利の余韻に浸つていると後ろから聞こえた女性の声に後ろを振り向く
そこには翼を広げクウガに突っ込む新たなグロンギがいた

「うおー！」

なんとかそれを避けグロンギを見た

「今度は飛ぶのかよ！？」

「勇樹！これを使いなさい！」

警官服を着た女性は腰の銃をクウガに投げ渡す

「おっと、サンキュー。 超変身！」

クウガは「ペガサスフォーム」へと姿を変え銃をペガサスボウガンに変えた

そして遅れて大和たちが工場の中に入る

「ん？ 今度はペガサスか」

「とひひゅーーーあ、お母さんーーー」

「え？」

大和達の声に振り向く女性

「綾香ーーー！ んなとこ来ちゃダメでしょ！ それにあなた達は？」

「あいつのダチです、あなたはこいつらの母親？」

「え、ええ、つてそりじやなくて！ 危ないからこから離れなさい」

「あの、グロンギも勇樹くんも行っちゃいましたよ」

美咲がそう言つと一同はさつきまで戦っていた場所を見る、だがそこには誰もおらず代わりに天井に穴が空いていた

「上か、行くぞ」

「ちよ、だから待ちなさい！」

勇樹達の母親の制止を無視し大和たちは階段を登つていった

「よつと、つてもう終わつたか」

大和達が着いたときには既にグロンギはおらず変身を解いた勇樹がいただけであつた

「ああ、逃げられちまつた」

そう言い勇樹はグロンギが飛んでいったであろう方向を見つめる

「ちょっとあなた達」

勇樹達の母親は大和達に話しかけた

「ん?なんすか」

「あんなところに一般人が入り込んだら危ないでしょ！」

「いや大丈夫ですって、オレ戦えますし」

「そういう問題じゃない！たとえそうだったとしてもあなた達はまだ子供なんだからこういうことは大人に任せていればいいの！」

「そういう割には勇樹を戦わせてたじやないっすか」

「それは・・・」

言われて勇樹達の母親は言いくもる

「クウガが唯一グロングを倒せるからだよ
「あ

代わりに勇樹が答えた

「それに俺は民間協力者として扱われてるからいいんだよ

「そう言いながら元に戻った拳銃を母親に手渡した

「ま、母さんもこの辺でいいだろ。それより帰ろうぜ、俺腹減つ
ちましたし

「え、ええ・・・

勇樹達の母親は複雑そうな顔をしながら銃を受け取り答える

「あ、遅れましたが俺は芳野大和です

「私は望月美咲です」

「そう、私は一之瀬 薫よ。ちょっと失礼」

勇樹達の母親、薫は携帯を取り出し相手と会話する

「一之瀬です、はい、一体は倒しましたが一体は逃がしました、え
え、わかりました」

携帯を切り勇樹達の方を向く

「「めん、これから署で会議が入つて今日は遅くなるわ

「ええー」

「まじかよー」

「『めんね、晩御飯はお弁当とかで済ませて』

「「ふーふー」」

勇樹達は不満の抗議を挙げる

「あ、じゃあ一人とも家に来る？」

「「「え？」」」

美咲の提案に三人は同時に聞き返す

「だから一人とも家で晩御飯食べてつたりどつかなつて」

「ほんとー? いいの美咲さん?」

「うん、家は大丈夫だよ。 薫さんもそれでいいですか?」

「ええ、でもいいの? 家の人迷惑じゃないかしら」

「多分大丈夫ですよ、じいちゃんそういうの気にしないですから」

「そう? じゃあお言葉に甘えて、一人とも、あまり迷惑かけちゃだ
めよ」

「「はーこ」」

「それじゃあよろしくね」

そう言つて薰は立ち去つた

「んじゃ、帰るとするか」

「うん」

「「お世話になります」」

そして四人は望月写真館へ向かつた

「私にクウガの」と教えてください。」

「なんだとてめえ！」

「お前はもう戦うな」

「やつとオレの出番か」

「未確認生命体・・・十号？」

「お母むーんーーー！」

全てを紡ぎ、未来へ導け！

ヒュードクウガ 第一章 ～古代の戦士～（後書き）

てなわけで一応第一章終了です

第一章はちょっとシリアスな展開になる予定です

ヒソードクウガ 第一章 ～妹の思い～（前書き）

今回から第一章です
では、どうぞ

ハピソードクウガ 第一章 ～妹の思い～

「じつや あどひこい」とだ?」

大和達は望月写真館に到着したとたん信じられないような光景に遭遇した

「こんなにお客さんがいるなんて始めてかも・・・」

それは写真館にたくさんの客が入り浸っていたといつものだった

「てか」「て漬れた喫茶店じゃなかつたか」

「うん、結構前に漬れてたはずだけど・・・。」「が一人の家なんですか」

「ああ、まあそういう気になるが

「ど、とうあえず裏口から入るっか」

美咲に促され大和達は裏口から中に入つていった

「「ただいまー」」

「おお、二人ともいとこだわー、いつまでもつてくれ

宗太郎は何人もの客の接客をしていて疲れ気味だった

「あいよ、にしてもすげえ客だな

「うん、お前に少しだけだったのに午後から急にお客さんが増え
てね」

「ああ、この辺は情報が広まるのが早いですか?」

後ろから綾香が顔を出しかづいた

「おや、その子達は?」

「新しい友達だよ、一之瀬勇樹くんと妹の綾香ちゃん

「勇樹です」

「綾香です」

「そつかい、美咲の祖父の宗太郎です」

兄妹が挨拶をし宗太郎も自己紹介した

「それで今日一人に家で晩御飯食べてもいいおつと思つたんだけど、いいかな？」

「ああ、構わないがしばらく掛かるよ」

「俺達は大丈夫です、それよりなにか俺達にも手伝えることありますか？」

「それならこれをあのテーブルに運んでくれないかな」

「はい、わかりました」

そう言って勇樹は皿に乗つた料理を持っていった

「あ、私も何かします」

「ならあのテーブルを片付けてくれないかな」

「アイアイサー！」

綾香も元気に返事をして走つていった

「ショートケーキとミックスサンデーできたらぜ」

「あ、じゃあ私持つていくな」

「すいませーん、オーダーお願ひしまーす」

「はーい、ただいまー」

そんなこんなで慌しくもなんとか五人で店を回していくた

「……………」

店の閉店時間になり落ち着いたのは八時過ぎとなっていた

「すまないね、こんな時間になってしまって。しかも一人にはお密さんだといつのに手伝つてもらつちゃつて」

「いえ、じ馳走してもらひのこなにもしないのは失礼ですんで」

「でも本当にす」「人の数でしたね」

「うん、あんなに来たのって今までなかつたと思つよ

「つーか」に本来は写真館なんだけどな

五人は談笑しながら少し遅れた夕食を摂っていた

「それにしてもこれおいしいですね、美咲さんが作ったんですか？」

「うん、小さい頃から料理の手伝いとかしてたから」

「くえ、すまじです美咲さん」

「あ、そんなことないよ。綾香ちゃんも練習すれば慣れちゃう
ぐるでわかるよ」

「あー、綾香には無理無理、こここつ家事とか苦手だし」

「あー、お兄ちやんひどーー！」

「せつまつめ前は、目割つてたよな」

「うー、ばれてた？」

「やーー、間われてやんのーー」

「うぬせえーー」

「まあまあ

「せつまつめ、じとんににぎやかな食事は久しぶりだね」

「たしかに、あんま家に誰か呼ぶこと少なかつたしな」

「それに一人にこっちでもう新しい友達ができるうれしいよ。　二

人とも、美咲と大和くんをよろしくたのむよ」

「いえ、こちらこそよろしくおねがいします」

「不束者の兄妹ですが」

「それじゃあお見合いみたいだぞ、お前ら」

「おつといけねえ」

「　　「　　「ははははは」　　」　　」

場所は移つて大和の部屋、大和、美咲、勇樹、綾香の四人はここに集まっていた

「で、いつお前はクウガの力を手に入れたんだ？」

大和が勇樹に質問した

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「こっちにもいろいろ事情があつてな」

「ふーん、まあいいが。この力を手に入れたのは大体一ヶ月ぐらい前になるかな」

勇樹は前置きをして話し出した

「そのころ、この辺にあの怪物が現れたんだ」

「グロングギカ」

「そんな名前だったのかあいつら、それは置いといて、俺はそいつらに襲われて絶体絶命となつたんだ。そのとき突然拾つた石が光りだしてベルトになつたんだ」

「光る石って？」

「襲われる前に変な洞窟に落ちたんだ、それ以来あの洞窟は塞がつちまつたがな」

(おそらくその石がアーチルの源で洞窟がリントの遺跡だろうな)

「んで、そのベルトで変身して難を逃れたってわけだ」

「なるほど、それからお前はその力でグロンギと戦つてきたってわけか」

「ああ、今日倒したので確か六体目だったかな」

「ほお、数えてたのか」

「いや、警察はあいつらのこと未確認生命体って呼んでて、一号二号って数えてんだ。で、今日倒したのが七号」

「といひことはあの逃げたのが六号あたりか」

「いや、あれは初めて見る奴だから八号だ」

「じゃあ一体まだ倒していないのが何個か」と?

「そういうのじやないんだ。クウガは未確認生命体四号って呼ばれてんだ」

「なるほど、そういうことか」

「まあ、これが俺がクウガになつた経緯だ」

「ああ、いひいろありがとな」

「あの、大和さん

「ん?なんだ」

「大和さんつてクウガのこといろいろ知つてましたよね」

「まあな」

「私にクウガのこと教えてください！」

「ああ、いいぜ」

「ホントですか？やつたー！」

「なんで綾香ちゃんはクウガのことを知りたいの？」

「だつてカツコイイじゃないですか！それにいろいろ知つてたらお兄ちゃんの力になれるかもですし」

「綾香・・・」

「そうこういとならオレの知つてる限りのこと、全部教えてやるよ」

「ありがとうございますー！」

こうして綾香は大和にクウガについて教えてもらつたのであつた

「それじゃあ、どうぞままでした」

「うわさまでしたー」

「子供達がお世話になりました」

時計が十時を切ったころ、薰が会議を終わらせ一人を迎えていた

「いえいえ、こちらも久しぶりににぎやかで楽しかったですよ」

「またいつでも来いよ」

「また明日」

大和達も一人を見送りに表へ出ていた

「大和さん、教えてもらったこと役立たせます」

「ああ、頑張れよ」

「之瀬一家は」「して帰つていった

「綾香ちゃんつて、お兄さん思いだね」

「ああ、そうだな」

「さあ、一人も中に入りなさい、風邪をひくよ」

「あいよ
はーい」

(妹にあんま心配させんなよ、兄貴)

そんなことを考えながら大和は家に戻つていった

ヒソードクウガ 第一章 ～妹の思い～（後書き）

いやー、セリフばっかになってしまったが大丈夫かな？

ハルソードクウガ 第一章 ~この町のヒーロー~(前書き)

一週間も空けてしまった・・・。
ひとまわ、ひとつ

ヒソードクウガ 第一章 ～この町のヒーロー～

大和と美咲が転校し、グロンギが襲撃した次の日

「はよーっす」

間の抜けた挨拶をしながら大和が教室に入る

「おはよー」

その後ろに続いて美咲も教室に入った

「あ、芳野君、望月さん！」

それに気づいたクラスの女子が一人に話しかけた

「ねえねえ、昨日一人が未確認生命体に襲われたってほんどう！？」

「「え？」」

突然聞かれたので一瞬なんのことかわからなかつた

「昨日見た人がいるんだ、未確認生命体に襲われてそこをクウガに助けられたって」

そこまで言われてやつと理解した

「いや、オレ達は勝手に首突っ込んだだけで別に襲われたとかじゃないんだが」

「えつ！？ そうなの？」

「う、うん」

大和にそう答えられ、美咲にも肯定された女生徒はがっくりした表情を浮かべた

「なんだー、せっかくスクープになると思つたのに」

「スクープ？」

「うん、私新聞部なんだ、んで転校初日に未確認生命体に襲われこの町のヒーロークウガに助けられた一人つて題名で作るうつと思つたのになあ」

あーあ、今週のネタぢうじょうと亥いてここの新聞部の女生徒が言つた台詞に大和はある疑問を覚えた

「なあ、クウガってこの辺じゅ有名なのか？」

「そりやあ、なんせ未確認生命体からこの町を救いに来たヒーローつて現れた始めはすゞい噂になつてたんだから」

少し興奮気味で説明する女生徒に圧倒されつつも話を続ける

「んじゅあクウガの正体とかもみんな知つてんのか」

「それがだんれも知らないんだ、だからもしかしたら正体知つてるかなと思つて一人に聞いてみたんだけど。もしかして正体見たり

とかした！？」

再び興奮気味で迫つてくる女生徒に仰け反りながら大和は答える

「い、いや、知らねえよ。 なあ」

美咲に同意を求める、言ひなよと田でサインしながら

「えつ、あ、うん見てないよ」

「そつかあ、残念。 もし見たら私にも教えてね」

そう言い残し女生徒は教室から出て行つた、同時に勇樹が教室に入つてきた

「オッス！」

右手を上げ軽快な挨拶をしながら勇樹が大和達の元にやつてきた

「おつ」

「おはよう」

「昨日はサンキューな」

「ううん、じつはお店手伝つてもうつたんだし、あおいこだよ」

「そつか？まあとにかく助かつたよ」

そこで大和はわしきの会話を思い出した

「なあ、勇樹」

「ん? なんだ」

「お前の・・・」

そこまで言つて止まる、人が多いところでもあれだなと想い場所を移そうかと思つたがもうすぐでホームルームが始まる時間だった

「俺の、なんだ?」

「いや、後でいい。ここで話すのはやばそうだし」

その言葉で勇樹は察し

「判つた、昼休み辺りで話そ'うぜ」

勇樹の提案に大和は頷いたところでチャイムが鳴つた

「んじや、後でな」

担任が入ってきたので勇樹だけでなく他の生徒も席に着いた

「・・・で、どうなんだ」

時は進んで毎休み、昨日の面子で昼食を摂りながら今朝のことを説明して大和は勇樹に聞いた

「なにが？」

「ようはお前がみんなに自分がクウガだつてこと黙つてんのかつてことだ」

周りに聞こえないよう小さめの声で話す

「まあな、母さんから口止めされてんだよ。あんまり自分がクウガだつて言つくなつてな」

「でも昨日は私達の前で堂々と変身してたよね」

うどんをすすつていた美咲が会話に割り込み質問した

「ああ、あの時は緊急事態といつかお前らが着いてくると思つてなかつたし」

「普段は警察の人達が一般人を非難させてるもんね」

勇樹がそう言つと綾香が補足した

「そうなると学校の連中で俺の正体知ったのって二人が初めてだな」

「なるほどな、まつ俺達も探す手間が省けたからいいんだが」

「探すつてクウガをか？」

「ああ、ちょっと訳ありでな」

「そういえばクウガのこと知ってるつて言つた時も訳ありつて言つてましたがどんな訳ありますか？」

綾香に聞かれ大和の箸が止まる

（まだ少し早いよな・・・）

「まあそのうち話すよ」

そう言い再び大和は定食を食べ始めた

そして放課後

「大和、美咲、帰ろうぜ」

大和が支度をしていると勇樹が誘つてきた

「ああ、美咲も大丈夫だろ」

大和は鞄に教科書等を入れていた美咲に聞いた

「うん、今日はお使い頼まれてないから大丈夫だよ」

「んじゃ、今日はどうか寄つてかねえか」

美咲の了解を得た大和は勇樹に提案する

「お、いいぜ。商店街の逆の方にでも行つてみるか」

「おう、そうと決まればとと行くか」

鞄を背負い教室から出ようとすると今朝の新聞部の女生徒が駆け込んできた

「大変！未確認生命体がこのすぐ近くに現れたつて！」

その言葉に大和達だけでなく教室に残っていた生徒全員が驚いていた

「うそ、やばくない？」

「巻き込まれないうちに帰ろうぜ」

「いや、ここにいた方が安全かも」

生徒達は混乱し次第に他のクラスからも騒ぎ声が聞こえてきた

「勇樹」

「ああ、いくぜ！」

大和と勇樹が一目散に教室から出てそれに遅れて

「あ、待って！」

美咲も一人を追いかけた

「キヤア――！」

今までに下校途中であるう生徒がグロングギに襲われていた

「ビガラゾボソゲダガドジドシザ」

そのグロンギは昨日クウガが倒し損ねた八号であつた。徒に向かつて襲い掛かろうとしていた

「ウチの妹がお嬢様のことを知る...」

そこに間一髪で大和が飛び込み生徒を抱え回避した

「ザセザ！」？

「危ないから逃げろ！」

は、はい！

生徒は走つてその場から離れた

「よし、今度こそオレが・・・」

大和は懐からドライバーを取り出そうとするが

「变身！！」

勇樹が走りながらクウガに変身してグロンギに飛び掛けた

「な、またか！？」

「お前も下がつてな、大和」

そしてクウガはグロンギと戦い始めた

「オレ・・・救世主なんだよな・・・？」

大和はまた変身すらできなかつたことに軽いショックを受け、美咲
が来るまでしばらく立ち尽くしていた

ハピソードクウガ 第二章 ～」の町のヒーロー（後書き）

いつたいいつになつたら「トイケイド出すんだ、自分

大和「オレって主人公なんだよな？」

一応そうだが話の流れからしてまだじぱいく出せないかな

大和「えー」

ハルソードクウガ 第一章 ～現れた青年～（前書き）

やつとシコタスマードになります

では、どうや

ペソードクウガ 第一章 ～現れた青年～

「くそつー飛ぶなんて卑怯だろー?」

飛び掛つて戦いを始めたまでは良かつたのだが距離を取った隙に八号は飛び、そこから空中から攻撃していくのでクウガにとつて戦いくい状況だった

「縁になれりやあまだ何とかなるのに・・・

この縁とはペガサスフォームのことであり、これに超変身すれば遠距離攻撃ができるのだ。だがそれも叶わずクウガはひたすら八号からの攻撃を回避していた

「つまあーチクショー、母さん達警察はまだかよ!?

警察に拳銃を借りられればペガサスフォームになれるがその警察も先ほど呼んだばかりで来るにはまだ掛かる

「苦戦してゐね、勇樹くん

クウガの様子を見て美咲が呟く

「ああ、やつぱり」はオレが・・・

大和は「うん」とばかりドライバーを取り出そうとするが

「お兄ちやーん!」

そこに綾香が駆け付け、またも邪魔された

「なんだ！？ どんだけオレを戦わせたくないんだこの世界は…」

「ま、まあまあ・・・」

変身すらできないことに大和はこの世界に向かつて突つ込みをし美咲がそれをなだめた

「綾香！？ 危ないから下がって・・・」

「これ使って！」

クウガが言い終わる前に綾香はクウガに水鉄砲を投げた

「水鉄砲・・・、これなら…」

なにか気づいたように顔を上げ手をベルトにかざす

「超変身！」

そしてクウガは緑の姿、ペガサスフォームへと姿を変えた

「・・・」

クウガは手に持った水鉄砲をペガサスボウガンに変え、それを眉間に位置に持つていき集中する

「・・・そこだ！」

「バビー？」

引き金を引き、クウガが放つた一撃は浮遊していた八号に命中した

「よし、これで止めだ！」

トリガーを引き、八号に狙いを定めて放とうとした

「お兄ちゃん後ろ！」

「なにっ！？ぐあ！」

だがそこに新たなグロンギが現れクウガに襲い掛かった

「ラダジャラゾグスバ、クウガ」

今度のグロンギ・・・九号は牛、と言つよりは闘牛を連想させる角が特徴的だった

「くそつ、一一対一か。それにこの姿じや接近戦はきつい、なら！」

そう言つとペガサスボウガンをグロンギ達に撃ち、すかさず距離を距離を取る。放った弾丸は九号に弾かれたが

「超変身！」

構えを取り、再びマイティフォームへ戻つて接近戦を始める

「はつーおりやあー！」

マイティフォームお得意の肉弾戦でグロンギ達にダメージを蓄積させていく

「はああー。」

回し蹴りで一対を吹き飛ばし、隙ができたところでクウガは右足に力を貯める

「うおおおおおおー喰らえー！マイティキックー！」

そして一体のグロンギにマイティフォームの必殺技の跳び蹴りをする。九号はとっさに回避したが八号には命中し、その体にクウガの紋章が浮かび上がる

「ブ・・・グゴゴー！」

八号の体は断末魔と共に爆発した

「まあ、次はお前だー。」

そう言って九号に近づくクウガ、九号はその場にあつたドラム缶を掴み上げクウガに向けて投げる

「くつ、そんなの当たるかよー。」

平然とそれをかわすが投げたドラム缶の先には

「ー.綾香ー。」

「綾香ちゃん、危ない！」

「へ？」

綾香が立つており、大和が気が付き駆け出すが距離があるため間に
合わない

「しまつた！」

「きやあ――――！」

思わず目を瞑り首を引っ込めた、だが綾香にドラム缶は当たらなか
つた

「・・・・・あれ？」

「大丈夫か、綾香ちゃん」

自分の名を呼ばれ、綾香は目を開き顔を上げる

「し・・・・紳一さん」

そこには警察官が綾香を覆いかぶさるようにして立っていた、そし
て彼の後ろでドラム缶が転がっていた

「綾香、大丈夫か！」

そこに大和と美咲も駆け付ける

「はい、真一さんが庇ってくれたので」

「あなたは・・・？」

美咲が見上げる形で聞く、その人は身長は大和達を越え、体もがつちりとしていた

「俺は坂本 紳一^{さかもと しんいち}、綾香ちゃんのお母さんのお部下の者だ」

紳一と名乗った青年は身だしなみを直しながらそう言った

「さて、未確認生命体には逃げられたか」

そう言われ回りを見渡すとそこにはもう九号はいなかつた、代わりに紳一を見つめ立ち尽くしていたクウガがいた

「・・・紳一さん」

クウガは変身を解き勇樹に戻る、その勇樹は少々浮かない顔をしていた

「・・・久しぶりだな・・・勇樹」

二人が険悪な空気を醸し出し、その場には遠くからのパトカーのサイレンだけが響いた

エピソードクウガ 第二章 ～現れた青年～（後書き）

てなわけで新キャラです

彼と勇樹の間にはいつたいたいなにが・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4644x/>

仮面ライダーディケイドAnother ~世界の救世主~

2011年11月27日20時52分発行